河内直史さん

行政も時代の感覚を取り入れた「ファッショナブルなまちづくり」という発想を

白根では、こんなことを言うとたいへん失礼ですが、店へ入れば何か買う、また買わざるを得ないという感覚があります。店に入って何も買わないと、商売のじゃまに来たような気になってしまう。日ごろからつながりのある店だと、お茶などいただいているうちに、なんとなく商品の説明を受けたりして、財布の中と相談しながら「それでは…」ということになる。

ところが、今の時代の感覚というのはそうではない。新潟あたりへ行きますと、買おうが買うまいが、子ども連れであろうが年寄りであろうが、店へ出入りします。なんの抵抗もないですね。

どんなに健康な人でもストレスがありますから、商店街を歩き、店へ入って、商品を見ているだけでも気分転換になる。

若者の感覚というのは時代の感覚、流行が取り入れられていないと注目しない。これだけ交通体系が発達した車社会ですから、ほとんどの人が月に一回くらいは新潟へ行く。歩いて二十分だと地元の商店街ですが、車で二十分だと新潟へ行ってしまう。

そういう意味で、例えば国道8号にどんどん市外の資本が入ってきていろいろな店が立ち並びますね。そのとき現在の商店街のかたがたが、どうそれに対応するのか。

やはり、まちづくりそのものが少しでも時代の感覚を取り入れた着眼がない限り、うまくいかないのではないか。このままでいったら、私たちの世代でまちが終わってしまうような感じがします。

そういう点からすると、私は行政も時代の感覚を取り入れた「ファッショナブルなまちづくり」という発想をもってもらいたい。それがないと、商店が時代に即応して、もっともっと伸びていこうとするときに、ネックになるような気がしてなりません。

山田泰介さん

地域エゴを断ち切って、みんなが一つの輪になって物事を考えよう。

白根市として三十年前に合併はしましたが、いまだに「一町八か村」的な考えから抜け出せないでいるという話をしました。

極端な言い方をしますと、国道にバイパスが通るといっても、また、カルチャーセンターができるといっても、私の周りの人はあまり関心がない。

白根の町の人はすごく関心を持ってその問題についていろいろなことを考えるのかもしれないんですが、なぜ新飯田の人が、あるいは大郷、臼井の人が、関心がないのか…。もちろん関心のある人もいます。利害があればなおさら関心があるんですが、そうでなければ関心は低い。

さらに、地域エゴがまだまだ強い状況にある。それが教育の面においても、文化施設の面においても、みんなの気持ちの中にまだ生きている。

商業的な問題であってもそうだと思うんですが、どうしても私であれば、自分の家を中心にしてしか考えないわけですね。お客様もやはり自分の家を中心に考えておられますから、国道で駐車場があって、品物が豊富で、値段が安い店があれば、だれも私の店を振り返ってくれない。それに気がつかない。そういうのがずーっと残っていて、我々の頭の中や、僕らの子どもたちの中にもまだ残っていくかもしれない。

それをいつの機会にか断ち切って、少なくとも中ノ口川と信濃川に囲まれたこの白根市という地域の人たちが、みんな一つの輪になって物事を考えられるまちをつくるのが先決のような気がします。

私もひと言　横山　清二郎さん

（上塩俵・農業・38歳）

ツアーの観光客を呼び込もう

まちづくりの基本は教育・文化の水準が高いこと、そして施設などをつなぐ道路網の整備だと思います。残念ながら白根はそのどちらも近隣市町村に比べて、水準が高いとはいえない。

近年、農地がどんどんつぶされていきますが、農業者として美田がつぶされていくのは忍びない思いがします。しかし、農業だけ、商業だけでは生き延びられなくなってきているのは事実です。

市内にはいくつかの観光果樹園があり、時期ともなれば大型バスが何台もやってくる。それを黙って帰す手はないですよ。

寺泊みたいに、ツアーの客をどんどん呼び込めばいい。笹川邸まで「越後豪農めぐり」のバスが毎日来ているんだから、それを橋一つ渡らせればいい。そのためには道路と駐車場ですよ。

大型バスが擦れ違えないような道路ではだめなんです。せっかくある国道8号を生かして、どんどん客を呼び込めるような農業を目指そうじゃないですか。

庭山　幸明さん

枠にとらわれない総合的な考え方で、例えば「凧」を生かした観光事業の拡大や商業地モデルの形成、さらには大学の誘致を。

まず白根の農業と商業とのかかわりについて考えると、主食としての米は非常にいい商品価値がある。「ヤミ米」という問題も出ていますが、これを裏返せば、商品として非常に魅力があるということです。つまり農業というのは、考え方ややり方、よその業種と結び付くといったことで、まだまだ発展性があると思うんです。

例えば白根の洋なしというのは、かなり前から作られています。最近、付加価値を高めようと、洋なしを「ワイン」という形で加工し、試作にも成功したという話を聞きました。

その中でたいせつなのは、農業者サイドの見方だけで取り組むのではなく、商業者や消費者の見方も取り入れて商品開発をしていこうとする、総合的なとらえ方だと思うのです。

また、商業というものは、文化や教育に付随して発展し、そうしながらある程度、他産業の方向性を決定するという気がします。

今私が考えているのは、一つの商業地モデルを念頭におき、その中で大型店問題やいろいろな商業のあり方を考えたほうがいいのではないかということです。

白根の顧客の新潟方面への流出というのは非常に多く、一つはレジャーショッピングという点、また商品の内容、商店街の雰囲気なども関係するでしょう。

そこで思い切って一つのモデルを掲げ、地元の人間が新潟に行かなくても、逆に新潟の人間が白根の商店街に来るような、魅力があるようなものを考えていかなければならないと思うのです。

白根には「凧」といういい資源があるわけです。凧合戦がないときにもじゅうぶんに堪能でき、イメージが湧くような一つの観光拠点としての建物を作り、それに付随したものをまちづくりに生かす。白根の伝統のあるまちづくり。当然そこに農産物などを観光事業として盛り込む。笹川邸、観光果樹園、洋なしワイン、そういうものを織り交ぜながら、観光事業を拡大していったらどうか。

さらに教育・文化に商業が付随するとさっき言いましたが、今の公共施設のある場所を拡大して教育施設を作ったらどうか。

もう都会の大学というのは、土地が高くて、そのままでは規模の拡大ができない。学校の経営を考えれば当然、分校という考え方が出てきます。それを誘致してもいいんじゃないか。

学生が一学年五百人としますと四学年で二千人。二千人の消費者が増えるわけです。二千人の衣、食、住を賄う。それに若い人が来るわけですから、若い人の感覚に合わせた商店の活性化が図られますね。また、学校の誘致によって親の文化的な意識、教育的な意識が高まる。

マイナスの面だけで考えると非常に発想が貧困になってしまいますから、いい方向に、いい方向に考えていけば、きっといい発想が生まれてくると思います。

竹内　正さん

「文化」をつくろうという気構えがないと、自立したまちづくりができない。住んでよかったと言えるまちに。

白根には、今住んでいる私たちが、誇りに思ったり、郷土愛を感じたりする、目に見える歴史や史跡といったシンボル的なものがあまりない。これは新潟県全般に言えることだそうです。

あるまちづくりの例なんですが、長野県の小布施町。ここは葛飾北斎が晩年過ごしたところで、数枚の北斎の絵があった。これをなんとか町の名物にしようという町民の運動で、北斎館という建物ができました。そして、食べ物では栗を使ったお菓子やおこわなどが名物になっている。

それよりも白根の食べ物のほうがよっぽどおいしい。それでも全国的に有名になってしまう。一人のリーダーが、どんどんまちづくりのプランを進めたことで行政を動かし、町の性格付けをしてしまったという事例です。

全国で、そう大きくない町にはかなりそういう例があります。白根もそういう可能性を秘めている。

先般広域農道を歩いていたら、初めて見るような景色に出会いました。新しい道なので行ったことがなかったんですが、朝焼けの弥彦山が非常にきれいだった。非常に感動しまして、ああ、白根にもなかなかいい所があるんだなぁと思いました。

白根のまちづくりを考えていくうえで、一つは、この白根の市街地で旧白根町が核になること。そのためには、まず「お客さん、どうぞここに集まってくださいよ」という商業当事者の「情熱」がないといけないんじゃないか。いわゆるここに「文化」をつくろうという気構えが必要です。何をやっても外からの資本では、白根独自の個性的な、自立した商業地の形成というのは難しいんじゃないか。やはり「ここに住んでいてよかったな」という気持ちがまず基盤にないと、まちづくりなんていっても、どこかのまねをして終わるんじゃないかという気持ちです。